

## 2013年度 研究室活動記録

### オープンラボ記録

本年度のオープンラボは昨年度に引き続き、1日2回開催とし、大学院生による研究室紹介と個別相談を中心に行った。

#### <実施概要>

- ◆ 日時：2013年6月5日(水)  
15:30～17:00, 18:00～19:30

<コース紹介>第一部(15:30～17:00)  
金宝藍(社会教育学・生涯学習論研究室)  
志村瑠璃(図書館情報学研究室)

<コース紹介>第二部(18:00～19:30)  
園部友里恵(社会教育学・生涯学習論研究室)  
松田めぐみ(図書館情報学研究室)

### ワンデーセミナー記録

本年度も図書館情報学研究室と社会教育学研究室の研究交流を目的として、主に両研究室の修論生が研究内容を発表するワンデーセミナーが実施された。

#### <実施概要>

- ◆ 日時：2013年9月9日(月)  
10:00～15:00
- ◆ 会場：文京区民センター
- ◆ 発表者：茅野良太・宮田玲(図書館情報学研究室)・松田弥花・張爽・胡子裕道(社会教育学・生涯学習論研究室)

## 2013年度講義内容一覧

**【生涯学習基本研究Ⅲ】【生涯学習特殊研究Ⅲ】**  
担当：教授・牧野篤，准教授・李正連，講師・新藤浩伸

夏学期ゼミでは、昨年度に引き続き戦後からの社会教育理論がどのように展開してきたのか、主要な論者の著作を読み解くことを通じてその発展過程をとらえることを試みた。今期は

特に佐藤一子と鈴木敏正に着目し、代表的な著作として佐藤の「現代社会教育学—生涯学習社会への道程」と「生涯学習と社会参加—おとなが学ぶことの意味」、鈴木の「教育学をひらく—自己解放から教育自治へ」と「生涯学習の教育学—学習ネットワークから地域生涯教育計画へ」についての検討が行われた。また、本人を招き直接議論を行う機会が設けられ、その際には文献の内容に関するだけでなく、研究に対する姿勢について等、様々な内容の質問が寄せられ、活発に議論が行われた。

**【生涯学習基本研究Ⅳ】【生涯学習特殊研究Ⅳ】**  
担当：教授・牧野篤，准教授・李正連，講師・新藤浩伸

本ゼミは、2部構成として行われた。前半では、戦後からの社会教育の流れを追うことを目的とし、確井正久著『社会教育の教育学』(1994)、『生涯学習と地域教育計画』(1994)藤岡貞彦著『社会教育実践と民衆意識』を輪読した。そのなかで、とくに社会教育内容論や方法・職員論、社会教育計画論に焦点を当て議論が行われ、社会教育理論と実践の接点を考察する契機となった。後半では、小林文人の文献を2週間精読したうえで、小林先生を招き、研究史を通してみられる日本社会教育の歴史から今日の動向まで深めていった。著者との対話を通して、文献の内容の理解にとどまらず、学問研究における資料集成や辞典づくりの意義を学び、社会教育における「地域」に対する多様な視点も得られた時間であった。また、同じく、末本誠著『沖縄のシマ社会への社会教育的アプローチ』を検討し、末本先生を招き、沖縄学としての社会教育学や、社会教育という学問領域を広げられる手がかりが得られた契機となった。

**【アメリカ・モデルの福祉国家と生涯学習】**担当：非常勤講師・藤村好美

本ゼミでは、「アメリカ・モデルの福祉国家と生涯学習」という講義名のもと、アメリカにおけるワークフェアや慈善団体・NPOなどを基盤としたアメリカにおける福祉政策について、歴史を概観しながら、主に英語文献を中心に検討を行った。G・エスピノーアンデルセンの「福祉国家の3つのレジーム」から始まり、1996年の改革以降のワークフェア政策、NPO

や社会的企業などの民間活力の役割、そして講師の専門である福祉的機能を果たすサンフランシスコ公共図書館の取り組み、最後には現状のアメリカ福祉改革について学んだ。ゼミ中は、現在の日本の現状とアメリカ・モデルを比較しながら、活発な議論がなされた。2013年6月14日には、社会的企業とされる「有限会社ビッグイシュー日本」の東京事務所マネージャーを務める、佐野未来さんを講師としてお招きし、「ビッグイシュー」成り立ちの背景と、日本における社会的企業の活動についてお話を伺った。

#### 【プログラム評価論】担当：非常勤講師・安田節之

本ゼミは、様々な実践活動をプログラムとして客観的に捉え、その結果や効果を評価し活動の質向上につなげるための方法論を身につけるという目的のもと開講された。講義の前半ではテキスト『プログラム評価：対人・コミュニティ援助の質を高めるために（ワードマップ）』（安田節之、新曜社、2011年）を使用し、プログラム評価の目的やプログラムを客観化・可視化する手順を先生に解説して頂くとともに、内容の疑問点を出し合い活発な議論が行われた。また、受講生各々に関わる実践活動について、実際にプログラム評価の手順に従って、テクニカルレポートを作成した。多種多様な実践活動に対して説明責任がますます求められる時代において、プログラム評価の技法は各自の実践活動の振り返りのみならず、実践活動計画の際にも応用できるだろう。

#### 【生涯学習論論文指導】担当：教授・牧野篤、准教授・李正連、講師・新藤浩伸

本ゼミは、研究室所属の大学院生が各自の研究の内容を報告し議論する場として、毎週開講されている。ゼミの進め方は、各学生が夏学期・冬学期にそれぞれ1回以上報告できるように調整をしたうえで、報告者は報告資料をゼミの2日前までにメーリングリストにて配布し、各自それを検討したうえでコメントをするという形式をとった。報告の目的はそれぞれ、修士課程1年生は修士論文のテーマの検討、修士課程2年生は修士論文の進捗状況の報告、博士課程は学会発表の予行演習、学会投稿論文の検

討、調査報告書の草稿の検討、博士論文の進捗報告、である。また各学生の報告のテーマは様々であり、(1) 中国、台湾、韓国、スウェーデン、アメリカなどの社会教育制度・政策に関する研究、(2) 公民館、図書館、博物館、文化ホール、児童館などの施設で行われる実践に関する研究、(3) 成人教育や職業教育など教育方法に関する研究、(4) 労働や家族など現代の社会問題に関する研究、などであった。

#### 【図書館情報学基本研究】担当：教授・根本彰

2013年前期の根本ゼミの図書館情報学基本研究では、前半は *Encyclopedia of Library and Information Sciences* を中心とし、参加者全員それぞれ自分の興味関心のある項目を2-3個を選び、発表しディスカッションした。例えば、School Librarianship, Document Theory, ISP Model, Children service と YA service, Sound and Audio Archives, Access in a Digital Age などがあげられ、より広い範囲で図書館情報学をみた。後半はシリーズ図書館情報学 1-「図書館情報学基礎」をテキストにした。第一章の「知識と図書館情報学」から、「メディアの知識資源」、「情報利用者と利用行動」、「学術コミュニケーション」と第五章「計量情報学」まで分担して発表し、各自の知見を深めることにつながった。

#### 【図書館情報学研究方法論】担当：教授・影浦峯

夏学期に開講された本ゼミでは、考えるということに必要な知識や技能を検討するとともに、知識や技能を用いて考えるということに取り組んだ。具体的には、文献リストの作成、文献の読解、論文の査読を行った。文献リストの作成において、社会科学、人文科学、図書館情報学の分野において読んでおかなければならないと考えられる文献、また、研究をするにあたり身につけておくべきと考えられる要素の参考文献を議論した。文献の読解では様々な分野の論文や古典を読んだ。この読解においては、受講生自身が読んでわかることができたこととわからなかったことの明確化を重視し、それをもとにわかるために必要なものは何であるかを検討した。論文の査読では、学会誌に掲載された論文を一つ取り上げ、受講生の議論を通

して設定した評価・検証の枠組みを用いてその論文を審査した。これは、本ゼミで検討してきた知識や技能を用いて実際に考えるという取り組みであった。

**【探究型学習のための学習環境構築】担当：教授・根本彰**

東京大学大学院教育学研究科と東大附属学校が連帯を結び組織された、学校教育高度化センターのイノベーション科研の中、根本先生が総括されている基幹学習のユニット〈探究型学習プロジェクト〉の主催で、2013年11月3日公開シンポジウム「主題：中等教育における卒業研究カリキュラムー学校図書館サービスを視野に入れて」が東大附属中等教育学校で開かれた。本ゼミでは、公開シンポジウムの準備・主催・まとめの過程の全般にかけての研究活動を行った。準備過程では、探究型学習・21世紀学力論をめぐる政策上の教育方針及び理論や、卒業研究・探究型学習と関わる教育的実践についての文献を検討し議論した。11月の公開シンポジウムでは、様々な学校における探究型学習の位置付け、指導方法及び評価法、学校図書館サービス支援の現況について、中等教育現場の教員と学校図書館職員と研究者とともに総合的に検討した。まとめの過程では、その議事録をベースにして、ゼミの参加院生による検討を行い、科研の報告書とする予定である。

**【情報構造媒体論】担当：教授・影浦峽**

冬学期に開講された本ゼミでは、Visualizing Data を読み進めながら、データの可視化とその分析に取り組んだ。データの可視化にはRを使い、Rの使い方もその都度確認したが、可視化よりも分析に力を入れた。扱ったのは1変量データであり、主に quantile plot および QQ plot について分析した。可視化したものが何をどのように表しているのかをひとつひとつ確認していったことで、わかっていると思っていたことをわからなくするというような方向で討論が進んだ。本ゼミは図書館情報学研究室の院生だけではなく、他研究科の院生および図書館情報学研究室に進学予定の学部4年生も参加した。

**【北欧の生涯学習と図書館】担当：非常勤講**

**師・吉田右子**

本ゼミでは、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドの公共図書館について、歴史、制度、サービス、他機関との連携などを詳しく見ていった。日本と比べ、司書のステータス・専門性が確立していること、移民に対するサービスの充実、ゲームや「すべての人のための図書」などの多様な図書館資料の存在など、公共図書館の活動の可能性と未来を感じさせられた。北欧各国の豊かな図書館活動に対して、日本の図書館イメージの貧困さ、公共図書館の現状についての議論がたびたび交わされた。北欧各国においても問題がないわけではなく、公共図書館の減少や図書館資料の質的变化、デジタルサービスの増加など、公共図書館は変革を迫られている。ゼミの終盤では受講生による発表が行われ、「フィンランドの教員養成」「スウェーデンにおける地域再生運動」「デンマークの図書館ネットワーク」「フィンランドの国語教科書における図書館と司書」などがあつた。

**【図書館情報学論文指導】担当：教授・根本彰、教授・影浦峽**

通称、「総合ゼミ」と呼ばれ、研究室所属の大学院生が各自の研究の進捗状況を報告し議論する場として、毎月1～2回開かれている。夏学期・冬学期ともに、各1回以上の発表の機会が設けられている。修士課程1年生は、学士課程で行った卒業研究の内容を報告したり、次年度からの修士論文の本格的な執筆に向けてのテーマ検討を行う。修士課程2年生は、修士論文の進捗報告が中心で、とりわけ冬学期は毎月発表を行い、執筆のためのペースメーカーとしている。博士課程は基本的に博士論文の進捗報告を行うが、それ以外にも学会発表の予行演習や、学術雑誌への投稿論文の添削がなされることもある。本ゼミの特徴は、内容面での議論もさることながら、発表形式や配布資料の構成と体裁、中・長期的なスケジュールの立て方など、研究遂行の方法論に関する多面的な議論や指導が行われる点である。本年度の大学院生の発表テーマは、図書館史、情報探索行動、計量書誌学、機械翻訳、学校図書館関連など多岐にわたっていた。

**2013年度 個人研究活動報告**

(図書館情報学研究室 特任研究員)  
〔河村俊太郎〕

今年から学生の身分から特任研究員という身分に変わり、大学を運営する側にほんの少し関わるようになりました。研究としては、博士論文の執筆と図書館情報学検定試験の運営を中心に行いました。博士論文については、東京帝国大学図書館を対象に、文学部心理学研究室図書室、経済学部図書室、附属図書館の蔵書構成に加え、図書館商議会の議事録、図書館システムのモデルを検討する事で附属図書館と部局図書館からなる図書館システムの全体像をある程度明らかにし、何とか形になり始める所までこぎ着けました。検定試験についても、今年は福岡会場を加え、6会場で試験を行い、ほぼつづがなく運営をすすめる事ができたかと思えます。あまり論文などの出力としては表れていませんが、今後に向けて重要な経験を積む事ができた1年でした。また、日本図書館情報学会誌に書評を1本書き、共著者として日本図書館情報学会研究大会にて発表を行いました。

(図書館情報学研究室 博士課程)  
〔崔英姫〕

戦後日本の中等教育における探究学習の歴史的展開の様相について、学校図書館との関わりを視野に入れ、博士課程の研究を進めています。本年度は、探究学習に関する研究書及び報告書などを網羅的に収集して、教科領域やテーマ別に整理する作業をしました。博論のテーマと直接的に関連のある研究成果は、都内の中高一貫A校の卒業研究の実態や抱える課題を、研究ノートとしてまとめたものとして、「高校生の卒業研究に関する事例研究—中高一貫校の執筆者の質問紙調査から」(共著、投稿中)があります。博論と間接的に関係した研究活動は、学校図書館の現況や児童・生徒の読書活動について、制度的な側面に焦点を当てて調べたものとして、発表「韓国における司書教師の任用制度の特徴及び現況」(2013年度図書館情報学会春季研究集会)や、共著「地域実態調査(1)愛知県・三重県市町村読書教育についてのインタビュー調査」(『子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究』「地域・学校WG」、国立青少年教育振興機構、2013)があります。

〔浅石卓真〕

昨年度に引き続き、中学・高校の理科教科書を

対象とした計量情報学の研究を進めました。主な研究成果としてはまず「高校理科教科書の記述様式に関する研究」という論文が「教科書フォーラム」第11号に掲載されました。これは高校の物理、化学、地学、生物の教科書における文章表現の形式を、科目の上位にある分野の性格と結びつけて論じたものです。また、「Comparative Analysis of Writing Styles of Biology Textbooks in Junior-high and High Schools」という題目で、図書館情報学分野の国際会議(A-LIEP 2013)で発表しました。これは学年の進行に応じた生物教科書の文章表現の変化を分析したものです。その他、学校図書館に関する共同研究として高校の学校司書が持つ教科の知識に関するインタビュー調査を行い、秋の図書館情報学会で発表しました。また、今年度の後半は博士論文の第一稿を書きました。これから大幅に加筆・修正して、来年度中には審査に出せるよう取り組みたいと考えております。

〔蘇懿禎〕

2013年前期、図書館情報学基本研究を履修した。*Encyclopedia of Library and Information Sciences*を教科書として図書館情報学の基礎をより固めていった。また、「北欧の生涯学習と図書館」の授業に参加し、今まであまり触れていない北欧の図書館の様子や運営に関してたくさん学び、とても勉強になった。

博士論文の進捗状況について、2013年6月の時点では、序章の「研究背景と目的」、「研究の視点と研究問題」、「研究方法」の初稿済みと、第二章「1952年～2012年国語科課程標準の変遷による読書指導の発展」初稿済みであった。そして、インタビュー1人を実施した(2013年3月)。11月に台湾で開催した「子ども、読書、思考」というシンポジウムに参加し、「日台における子どもの読書に関する政策と法律の比較について～2000年から2013年まで～」を題した論文を発表した。現在は、この論文をベースにし、博士論文の第一章に合わせ修正しているところである。

〔井田浩之〕

本年度は共同研究と個人研究に取り組んだ。共同研究においては、学校教育高度化センターの院生プロジェクトで、「21世紀型スキル」をめぐる理論と実践に関する研究—協同学習を実践する教

師の振り返りから」と題して、日本国内外で提唱されている資質能力に関連する文献研究を行い、新しい資質能力を「教員」がどのように理解し、授業を創っていくのかを研究した。21世紀になって様々な資質能力が提唱されるものの、それが本当に「人はいかに学ぶのか」の理論に基づいているのか、具体的にどのように育成していくのか。教育学的な知見を深めることにつながった。個人研究では「知識創造型の情報リテラシー教育」(『情報の科学と技術』2014年1月号)を発表した。「情報リテラシー教育」という図書館情報学の中では成熟しつつある研究テーマを、もう一度「人の学び」の観点からカリキュラムとして再構築していくための前提を論じつつ、今後の課題について言及した。

(図書館情報学研究室 修士課程)

[足立諒子]

今年度の主な活動は以下の通りです。

・日独の協同プロジェクト(JSPS-DAAD Collocation Project)への参加

主にイディオムのバリエーションの選定を担当しました。8月には、函館・東京での日独研究チームのミーティングに参加しました。また、11月には、マレーシア、ペナンで開催された Fifth International Language Learning Conference に参加し、プロジェクトを代表して共同研究の発表を行いました(論文タイトル: "Development and Use of a Platform for Defining Idiom Variation Rules")。

・修士論文の執筆

個人研究では、修士論文の執筆に取り組みました(論文タイトル: 情報探索行動の「終わり」という概念の検討 ―図書館情報学分野の論文の分析から―)。

[茅野良太]

2013年度、私は修士論文の執筆および修士論文の執筆に向けた研究を行った。またそれに関連して、9月に行われた当コースのワンデーセミナーおよび10月に行われた日本図書館情報学会第61回研究大会にて、「ネットワーク構造として見るメディアおよび記号の編成: メディア環境記述の新たな枠組みの提案」という題目で研究発表を行った。研究室運営に関しては、オープンラボ委員とワンデーセミナー委員を、足立諒子さん、西川昇

吾、三山雄大さんと一緒に務めさせていただき、これらのイベントの運営に携わった。その他、個人的な活動として、他コースの院生との交流を図り、親睦を深め、院生間で研究関心の共有や意見交換ができる環境づくりに取り組み、私自身もその恩恵に預かることができた。

[宮田玲]

昨年度に引き続き、自治体ウェブサイト文書の多言語化を支援する枠組みとシステム環境について研究を進めました。愛知県豊橋市のウェブサイト文書を対象として、機械翻訳の精度向上のための制限言語ルールを作成し、その効果を検証しました。評価実験の結果、翻訳品質の大幅な向上には至りませんでした。改善の方向が示されたので、今後一層ルールの改良に取り組んでいきたいと思えます。なおこの研究の成果は2013年3月の言語処理学会第19回年次大会と、9月のMT Summit XIVにて発表しました。その他、今年度は特にシステム開発に力を入れ、文書の構造化や制限言語の知見を組み込んだ執筆支援システムのプロトタイプを作成しました。修士論文では、これらの研究について、図書館情報学的な位置づけを模索しながら整理しなおしました。また今年度より、ドイツのチュービンゲン大学との共同研究に携わり、日独のイディオムに関する言語学・工学的な研究を進めています。

[松田めぐみ]

本年度は、学校図書館における教員サポートを担う学校司書に興味を持ち、共同研究を行いました。教員サポートの中でも特に教科支援に焦点を当て、学校司書が教科を支援する上でどのような知識が必要かを検討しました。従来の図書館情報学の知識の他に、教科を教える上で必要とされると考え、インタビュー等で研究を進めました。この研究の成果は、「高校の学校司書がもつ教科に関する学問の知識: 物理学の基本文献の把握状況から」というテーマで、日本図書館情報学会で発表しました。

また、昨年度まで学校司書として勤務していた学校での実践を「学校司書と司書教諭による図書館改革」として関東地区学校図書館研究大会で発表しました。今後は、学校図書館による教員サポートの実態を明らかにしていくために、まずは実践

事例及び先行研究の収集を行い、研究を進めていく予定です。

(社会教育学・生涯学習論研究室 特任助教)

[荻野亮吾]

2013年1月～12月における研究・活動内容を報告します。

(著書)

1. (共著)『教職に関する基礎知識』(今西幸蔵・矢野裕俊・古川治編, 八千代出版, 2013年4月) 161-170頁。

(翻訳書)

2. (共訳)『学習の本質: 研究の活用から実践へ』(OECD 教育研究革新センター編, 立田慶裕・平沢安政監訳, 明石書店, 2013年3月) 265-290頁。

(論文・雑誌記事)

3. (共著)「地域における社会的ネットワークの形成過程に関する研究: 飯田市における分館活動を事例として」『東京大学大学院教育学研究科紀要』52, 2013年3月, 233-250頁。

4. (共著)「都市型公民館における『労働』をテーマにした事業の意義と課題」『日本公民館学会年報』10, 2013年11月, 58-67頁。

5. (単著)「サービス・ラーニングの教育的特徴」『文部科学教育通信』327, 2013年11月, 16-17頁。

6. (共著)「立命館大学のサービス・ラーニングへの取り組み」『文部科学教育通信』328, 2013年11月, 18-20頁。

7. (単著)「地域全体を学習の場とした大学教育の推進: 松本大学の取り組みから」『文部科学教育通信』329, 2013年12月, 16-18頁。

(報告書)

8. (共著)『生涯学習の学習需要の実態とその長期的変化に関する調査研究』(国立教育政策研究所編, 2013年3月) 207-218, 249-261頁。

9. (共著)『「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究」【外国調査ワーキンググループ】報告書』(独立行政法人国立青少年教育振興機構編, 2013年6月) 5-23頁。

10. (共著)『「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究」【教員調査ワーキンググループ】報告書』(独立行政法人国立青少年教育振興機構編, 2013年6月) 65-78頁。

11. (共著)『地域密着型公民館の可能性: 内灘町

公民館調査報告』(東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室 内灘町社会教育調査チーム, 2013年8月) 66-69, 70-84, 123-126頁。

(学会報告)

12. (共同)「教員の読書活動と読書指導に関する実証的研究: 『子どもの読書推進と人材育成』調査の結果より」日本教育社会学会第65回大会, 2013年9月, 埼玉大学。

13. (単独)「地域社会の再編と公民館の役割に関する事例研究: 公民館を基盤にした『社会的ネットワーク』形成の観点から」日本公民館学会第12回研究大会, 2013年11月, 岡山理科大学。

(学会活動・社会的活動)

14. 東京大学・(株)和井田製作所ものづくりプロジェクト MONO LAB JAPAN 事務局 (2011年4月～2013年12月)

15. 日本社会教育学会幹事 (2011年10月～2013年9月)

16. 日本公民館学会理事・年報編集委員 (2012年12月～現在)

17. 文部科学省平成25年度優良PTA 文部科学大臣表彰審査委員 (2013年7～9月)

[松山鮎子]

本年度より、社会教育学研究室の特任助教に着任いたしました。主な活動として、岩手県大槌町での高齢者支援、および、被災地支援団体・教育関係者への聞き取り、千葉県柏市の豊四季台くるるセミナーの実施(第5回「地域文化を掘り起こす-語りを聞き取るということ」の講義担当)と、受講者へのアンケート調査などを行いました。加えて、共同研究では、内灘町・飯田市の公民館関係者の方々への調査訪問に参加いたしました。

また、本年度の研究活動は、下記のとおりです。

(論文・共著)「子どもの貧困と対抗戦略に関する教育学的研究-国際比較の視点から-」『早稲田教育評論』第24巻第1号, 2014.3刊行予定

(報告書・共著)「中間報告書: 子どもの貧困と対抗戦略に関する教育学的研究-国際比較の視点から-」研究代表・小林敦子(平成24～25年度早稲田大学教育総合研究所一般研究部会)

(学会発表)「大正期の児童文化運動の学校外教育的側面について-『話方研究』にみる口演童話活動に着目して-」日本社会教育学会第60回大会,

2013.9 (平成 25～27 年度科学研究費補助金・若手研究 B・課題番号 25780491)

(社会教育学・生涯学習論研究室 博士課程)  
[古壕典洋]

2013 年の研究活動は、以下の通りです。

- ・論文  
「初期遠隔教育論における“distance”の意義—形態論から行為論への転換過程に注目して」『日本通信教育学会研究論集』2013, pp.1-14.  
「生涯学習と社会を記述する視点—飯田市公民館調査を題材に」『東京大学大学院教育学研究科紀要』(牧野篤・新藤浩伸と共著) 第 52 巻, 2013, pp.203-232.
- ・書評  
「Moller, Leslie. & Huett, Jason B. (eds.) *The Next Generation of Distance Education: Unconstrained Learning*, Springer, 2012.」『日本通信教育学会研究論集』2013, pp.97-101.
- ・報告書の編集と執筆  
『地域密着型公民館の可能性—内灘町公民館調査報告』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ第 5 号) 2013, pp.10-22. pp.50-64. pp.101-106. pp.133-136.

[豊田香]

本年度行った研究活動は、主に以下の 4 点である。①研究論文(査読付き・書店販売):成人学習理論に基づき、成人学習実践を授業改善アンケートの自由記述から分析してモデル化し、論文にまとめた。『専門職大学院ビジネススクール院生視点の授業満足基準が示唆する「開放型学習モデル」生成の試み』(質的心理学研究 2014, (13). 41-61. 新曜社) ②研究論文(査読付き・第 2 著者):2012 年に実施した企業研修の効果測定結果を論文にまとめた。『SI 企業のプログラムマネージャー育成に関する考察』(山本秀男・豊田香・湯野川恵美, 国際 P2M 学会誌, 2013, (8). 49-63.) ③学会発表:質的研究法 TEA(TEM/TLMG/HSS)の発展的活用について。『理論と実践を架橋する学びがもたらす社会人のキャリア観の変容のプロセス—ビジネススクールの学びを人的資源とするために—』(大会準備委員企画, 「時間と場で成りゆく生(せい)—TEA という方法論の可能性」日本質的心理学会第 10 回大会. 立命館大学. 2013 年 8 月 30 日発表) ④著書・共著:『ワードマップ

複線経路・等至性モデル(TEM)』第 II 部 研究実践とそこからの生成 二章 研究への適用の拡がりから 7) 経営実践, (安田裕子他, 編), 2014 年 8 月出版予定. 新曜社。以上

[娜仁高娃]

本年度は主に行った研究活動は以下の通りである。

中国建国以後のメディアにおける教師・生徒関係をめぐる認識の変遷, つまり「教育的関係」論の変容およびその社会学的根拠を明らかにする研究を継続している。関連資料を蒐集しながら, 教師・生徒関係の変遷の実態をより正確的に把握するために教師に対するインタビューを行っている。そして, 「中国の教育研究におけるブルデューの実践論への接近—中国の基礎教育に対する思考パラダイムの転換の視点から」という論文を執筆している。今年中, 投稿したいと考えている。

[侯婷婷]

今年度は, 社会教育分野の基本文献を読み進めたいうえ, 様々な講座に参加し, いい刺激をたくさん受けながら, 個人研究を行いました。中国における農民工子女教育の行方を念頭に置いて, 主に民営農民工子女学校をめぐる政策と現状の調査に取り組んでいました。民営農民工子女学校に関する国レベルの方針政策は, どのように自治体で普及, 定着していくのか, 自治体に現実化され, 実施される過程では, いかなる特徴と問題点が見られるのか, その要因や残された課題とは何なのかについて考えて, 「中国における民営農民工子女学校に関する政策の展開と実施—上海市の事例を中心に—」にまとめました。また, 夏休みに, 中国済南市の数箇所の農民工子女学校を訪問し, 学校と政府, 大学, 社会団体, 社区との連携関係について, 各校の校長先生を対象に聞き取り調査を行って, 現状を把握しました。

[丁 健]

本年度では, 個人研究としては, 中国近代教育における郷村建設運動がどのような形で展開していたのかについて考察した論文「民国期におけるキリスト教の中国郷村建設運動に関する一考察—金陵大学農学院・蘇州中華キリスト教青年会を中心として—」を執筆し, 生涯学習基盤経営コース紀要 38 号に投稿しました。また, 共同研究としては,

石川県内灘町の公民館調査に参加し、各公民館の役員や公民館活動を行っている方々への聞き取り調査を行いました。

[中村由香]

本年度行った研究は、以下の通りです。

(論文・共)「都市型公民館における『労働』をテーマにした事業の意義と課題」『日本公民館学会年報』第10号、2013年11月、pp.58-67。

(報告書・共)「近代社会(または明治期)以前からの集落と公民館:向粟崎公民館・西荒屋公民館」「昭和時代の地区と公民館:鶴ヶ丘東公民館」「町会と公民館組織の関係」東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室 内灘町社会教育調査チーム『地域密着型公民館の可能性:内灘町公民館調査報告(学習基盤社会研究・調査モノグラフ)』第5号、2013年8月、pp.23-27, 38-42, 82-87, 126-130。

(学会発表・単)「子育て期の家族を対象とした学習機会の整備と社会教育の役割」日本社会教育学会第60回大会、2013年9月。

[大山宏]

本年度行った研究は、以下の通りである。

#### 1. 学会発表

「韓国における青少年支援の実態」日本社会教育学会第60回大会、2013年9月

#### 2. 報告書

東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室 内灘町社会教育調査チーム『地域密着型公民館の可能性—内灘町公民館調査報告』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ第5号) 2013, pp.28-37, 118-122, 130-133

#### 3. その他

昨年度から引き続き石川県内灘町の公民館調査に参加し、各地区の公民館関係者を対象とした聞き取り調査を行った。また世田谷区で行われている中高生支援事業の検証作業にも携わっており、こちらは2014年4月頃までに報告書としてまとめられることとなっている。

[金宝藍]

本年度の研究・活動内容は以下の通りです。

#### 1. 論文

「リスク管理人材育成基盤としての「知の市場」—10年間の発展史とこれから—」

(今給黎佳菜(主)・中屋雅江・増田優と共著)技術革新と社会変革、第6巻、第2号、2013年1月、pp.3-31

#### 2. 学会発表

①「日本の社会教育における「政治的主体」の形成をめぐる再検討—「市民的リテラシー」を手がかりにして—」2013年9月28日 日本社会教育学会第60回研究大会(自由研究発表)

②「「知の再構築」に向かうボランティア学習ネットワーク—「知の市場」の事例を通して—」2013年9月24日 社会革新技術学会 第7回学術総会

#### 3. 共同研究

東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室 内灘町社会教育調査チーム『地域密着型公民館の可能性—内灘町公民館調査報告』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ第5号)の一部を分担執筆

②飯田市民館調査に参加し、分館役員やサークル活動を行っている地域の方々への聞き取り調査

#### 4. 報告

『東アジア社会教育研究第18号』「韓国の平生教育この1年」を分担執筆

#### 5. 実践活動

お茶の水女子大学・知の市場共催講座「韓国学1」企画運営

まちづくり・社会的経済・市民力量形成などに関する現場研修及び国際交流活動に参加(6, 7, 12月)

[園部友里恵]

#### 1. 国際学会での自由研究発表

2011年度に執筆した修士論文の内容をもとに、IDEA(国際演劇教育学会、パリ)において研究発表「Theatre for Residents of the Countryside in Japan: Transformation of Women Volunteers」を実施した。

#### 2. 演劇的手法を活用した学習活動に関する調査研究

昨年度後半から今年度前半にかけて、特に企業研修に焦点を当てて進めてきた。「企業研修における演劇的手法の活用の変遷:ロール・プレイングからインプロへ」『演劇教育研究』第4号、2013, pp.40-56.)

今年度後半には、高齢者による身体を通じた学習に関心を抱き始め、来年度以降、本格的に調査



研究および実践活動を行っていく予定である。

### 3. 実践活動

8月に本郷と柏市高柳地区の2か所で実施された「東大キッズセミナー」においてインプロのワークショップを行う他、岩手県大槌町の高齢者施設、柏市豊四季台団地の東大セミナーや柏市社会福祉協議会主催の介護ボランティア研修等でもワークショップや講座を行った。

[都甲友理絵]

2013年の研究及び活動内容は、以下の通りである。

個人研究としては、地域博物館における学芸員の役割をテーマとして、月刊社会教育の博物館関連記事(1968～2011年)を蒐集し、市民の学習支援という観点から時代毎の議論の特徴を描くことを試みた。次年度は、さらに研究を深めて時代毎の変化の要因について明らかにし、論文としてまとめていきたい。

共同研究・活動としては、昨年度に引き続き、日本社会教育学会プロジェクト研究「社会教育としてのESD」の定例研究会に参加させていただいた。また、柏市高柳地区児童センターにて、キッズセミナーの講座「宿題も恐くない!?東大生の寺子屋」の企画、運営を胡子裕道、浦綾乃とともに担当した(2013年8月8, 21日)。また、平塚市図書館への訪問調査に同行し、平塚市の社会教育についての報告書執筆に取り組んだ。

[山口香苗]

2013年9月より台湾師範大学(台湾)に留学中。

台湾の社区大学の発展と役割について、資料収集と参与観察を中心に調査を行っている。また台湾の社会教育、生涯学習の歴史と動向についても研究を進めている。

山口香苗, 王美璇「台湾の生涯学習 この1年一楽齡学習政策を中心に」『東アジア社会教育研究』18号, 2013年9月, pp.153-164.

[相良好美]

#### 1. 個人研究

本年度は、修士課程より引き続き、日本における多言語・多文化共生を研究テーマとし、とりわけ(1)日本における多文化共生理念の展開過程についての基礎資料の収集、(2)定住外国人の高齡

期不安に関する質問紙作成と群馬県内におけるヒアリングの2点を中心に取り組んだ。

#### 2. 共同研究

研究室の共同研究では石川県内灘町および長野県飯田市における公民館調査に参加している。また、学校教育高度化センターの院生研究プロジェクトに参加し、「21世紀型スキル」をめぐる理論と実践に関する研究—協調学習を実践する教師の振り返りから—と題して近年提唱されている「21世紀型スキル」の育成と評価の実際について、埼玉県内で協調学習を実践する教師の振り返りに焦点を当てて調査研究を行った。そのほか、東京学芸大学連合大学院の院生プロジェクト研究では、青年期の自己形成に「重要な他者」が及ぼす影響について、とりわけニューカマー青年を事例に研究をすすめている。

(社会教育学・生涯学習論研究室 修士課程)

[林 高倫]

今年度は、夏学期を休学期間とし、修士論文に向けてのテーマをもう一度検討するところから始めた。林間学校研究という設定から、公民館事業を担う職員への関心により自分の興味が向いていることに気付き、職員と住民との関係に着目することにした。具体的な事例を掘り起こし、当時の記録を丁寧に記述し、報告書のような形でまとめてみるところに修士論文の出発点を得た。休学期間に出席した大学院のゼミの中で、偶然出された「感情労働」の話題が頭に残り、それを社会教育職員の日常と重ね合わせることで、職員の専門的な部分に迫れはしないかと考えた。冬学期に入ってようやく章立てに取り組み、慌ただしく修士論文を執筆した。進学を考えているが、修士課程の際と同じように、現場のフィールドワークを中心に研究を進めたいと考えている。修士論文では断念した、地域のお役である消防団への着目をもう一度取り組んでみる事も検討している。また、感情労働の現場との関わりを持ち、感情労働の研究への模索もアイデアとしてはある。

[胡子裕道]

本年度は修士論文の執筆にとりくみました。社会教育学の中でも文化についての研究の枠組みについて検討を行い、これまでの論じ方とは異なる枠組みで研究を進めていく必要があるのではないかと、という提起を行いました。また、社会教育研

究全国集会の「地域文化の創造と社会教育」分科会の過去40年以上の資料を1冊にまとめ、8月の全国集会では発表も行いました。研究室のとりくみでは、千葉県柏市の高柳地区で、夏休みに小中学生の学習支援を行いました。小学生、中学生、そしてわれわれ大学院生と、幅広い年齢層の人が集まり机に向かうという経験は、新鮮な驚きがありました。昨年度から2年間を通して、社会教育学の文化についての先行研究、社会教育雑誌の文化活動についてとりあげた記事、全国集会での話題やそこで報告された実践記録などを読み進めてきた結果を論文としてまとめられたことが、本年度の成果です。

[加藤毅典]

西東京市を事例に、自治体再編がもたらす住民による学習コミュニティの動態をテーマとして修士論文を執筆した。自治体再編に関する雑誌記事や論文・書物を中心に自治体再編の歴史と、それに伴う地域住民の学習や運動の歴史を調査、修士論文の1~2章にまとめた。また地域(西東京市)の方へのインタビューや地域資料の収集、学習活動への参加等により現地での調査を行い(論文第3章)、集めた情報をもとに再編後の自治体における持続可能なコミュニティ形成の方策について考察を行った(論文第4章)。

昨年に引き続き、西東京市の公民館、および三多摩の複数の公民館の学習活動・障害者教室のボランティア活動に参加し、実地的な体験学習を行っている。

現在は、アニメーション映画や漫画文化と社会教育の関わりについても、関心を持っている。

[葛一枝]

本年度は、修士論文「中国における中高年世代の『高齢期の生き方』観に関する一考察—宜昌市在住者のライフストーリー分析を通して—」の執筆を中心に、研究活動を行った。本研究は、ライフストーリー研究法を用いることで、これまではほとんど光が当てられてこなかった、高齢期の生活に関する当事者である中高年世代の主観的意味世界に接近しながら、彼らの内側から望ましい高齢期の生き方を解明しようとする新しい試みである。本研究を通して、高齢者は、自らの「生活の質」を向上させる側面があり、従来の先行研究で描かれるような受動的な存在ではなく、むしろ、

主体的な存在であることを明らかにした。また、彼らは常に周囲からの恩恵を社会や下の世代に返そうとするため、社会にとっても能動的なアクターとなることを解明した。今後、異なるタイプの地域で調査を実施し、事例を蓄積して比較検討することで、中国における高齢者の実態や意識を多面的かつ包括的に把握していきたいと考えている。

[黒田直史]

<個人研究>

修士論文「まちづくりをめぐる市民の行政参加に関する諸課題—下北沢駅周辺地区・地区街づくり計画を事例に一」を執筆した。修士論文執筆にあたり、文献調査に加え、下北沢地区の街づくり計画に関わる住民運動や市民活動の参加者への聞き取り調査を行った。

<共同研究>

「街ing本郷」および千葉県柏市高柳地区との共同で開催した「東大キッズセミナー」においてマジック講座の講師を担当し、報告書を分担執筆した。

株式会社拓人ホールディングスとの共同プロジェクトに参加し、中学数学の問題・解答についての分析を行った。

[杉浦ちなみ]

本年度は修士二年となり、個人研究としては特に修士論文の執筆に意識がそそがれた年度であった。本年度執筆した修士論文では、奄美大島のしまうたという地域文化とともに生きている人びとの姿を、現地でのフィールドワークをとおして描き出した。その執筆過程においては、自らが関心をもつテーマとして、人間、文化、学ぶことについての文献から学びつつ、昨年度に引き続き、研究室のゼミ等をとおして社会教育・生涯学習をとらえる基本的な視点を学んできた。そのほか、本年度の活動として、①新藤浩伸講師のもと、文化に関する海外文献の翻訳作業に取り組み、②地域文化研究会における共同研究への参加、③社会教育研究全国集会地域文化分科会の資料集の編集への参加、④社会教育研究全国集会地域文化分科会において、分科会の歴史について胡子裕道氏と共同発表をした。

[高野英江]

今年の研究室での1年は、修士論文の執筆と夏

の東大キッズセミナーに関わることが出来たことが大きかったと思います。まず、キッズセミナーでは先輩のワークショップの準備の様子などを見ていて、とても勉強になりました。かねてから写真を使ったワークショップをやってみたくてぼんやりと思っていたことが実現でき、本当に良い思い出となりました。おそらく1人では実現までのステップを上手く進めることができなかつたと思いますし、今後ワークショップに関わっていくにあたって財産となる経験ができたと思います。また修士論文執筆では、書く前の段階で考えることばかりに集中してしまい、書くという本来の作業にもっと時間を使えばよかったと反省しています。しかしながら、先生方、先輩方にアドバイスをいただきつつ、なんとか形にすることができ、論文を書くことの難しさ、楽しさが少しだけ分かったような気がします。研究室外では美術館でのインターンシップ、すぎなみ社会教育の会『つながる杉並の社会教育・市民活動』（エイデル研究所、2013年）の執筆活動への参加などを行いました。

[張 爽]

本年度の研究は、主に、修論研究、文献の通読、共同研究を中心に行った。修論研究では、「日本における孔子学院のあり方に関する一考察—授業観察及び関係者へのインタビューを中心に—」をテーマに、修士論文を執筆した。論文執筆にあたり、2013年10月～12月までの2カ月にわたり、現地調査を実施した。都内にある孔子学院を訪問し、実際に受講生と一緒に授業を受け、授業における教育実践や受講生の反応などを中心に観察を行い、さらに学院長、講師、受講生を対象に聞き取り調査を行った。また、前年度に引き続き、生涯学習・社会教育に関する知識や知見を広めるために、ゼミの指定文献や関連文献を通読した。共同研究に関しては、飯田調査に参加しており、研究室側と飯田市公民館の担当者との調査打ち合わせに参加したが、これからは研究室メンバーと一緒に飯田を訪ね、現地調査する予定である。

[西川昇吾]

本年度は、修士論文『「労働」をとらえる視点に関する研究—社会教育学における労働研究の基礎として—』の執筆を中心に研究を行いました。論文では、社会の構造が変化し、雇用のあり方も変

わり、正社員・非正社員ともに働き方が過酷さを増しているという状況を踏まえた上で、人々が「働きがい」を感じられるような労働のあり方、働き方とはどのようなものなのかということについて一定の見解を示しました。さらには「労働」や「働くこと」の内実に関する議論が、従来の社会教育学において、必ずしも十分に展開されてこなかったことを指摘し、その必要性を提起しました。今後はこの修士論文をベースに、論文の中であまり取り扱うことができなかった部分や、研究を進める中で出てきた新たな課題を深める形で個人研究を進め、さらには研究室として行う活動にも積極的に参加し、知見を広げていければと考えています。

[家保咲希]

今年度は4月に修士課程に入学し、ゼミでの文献購読や発表を通じて社会教育の基本的な考え方を身につけるとともに、自身の視野を広げるよう積極的に外部のシンポジウムやイベントに参加し、自分の関心や問題意識について考える一年となりました。研究室の共同研究としては、石川県内灘市の公民館調査、及び飯田市公民館調査に参加しました。特に内灘市に関しては現地に赴き、介入調査の技法を学びました。また、学部ゼミの一環として飯田市のフィールドワークに参加し、様々な実践活動に触れました。その中で飯田市風越高校の地域学習に関して追加調査を行い、地域学習の効果について報告書にまとめました。現在、自分の問題意識としては「幸せ」という漠然としたテーマを定めましたが、どのような形で研究を進めていくか試行錯誤している段階です。来年度の修士論文執筆に向けて、先行研究の把握とともに自身のテーマを定めていきます。

[浦 綾乃]

本年度は、学部ゼミ・院ゼミで社会教育・生涯学習の基本的事項を学んだ。夏休みには、飯田市でフィールドスタディに参加し、12月に追加調査も行い、「オーケストラと友に音楽祭」をもとに報告書を執筆した。また、ものラボのキッズセミナーにも参加させていただき、研究室の皆さまの講座のアシスタントをするほか、都甲氏・胡子氏とともに「寺小屋」の講座を担当した。研究室の共同研究としては、飯田市・内灘町へ調査に行かせていただいた。数々の調査に参加させていただき、

勉強したことを生かして、個人研究としては広島県広島市、湯ノ山温泉旧湯治場の保護・活用運動を調査に行く予定である。過疎地における生涯学習の可能性を解明したい。

[松田弥花]

本年度、主に行った活動は以下の通りです。

①生涯学習基本・特殊研究ゼミ参加：通年で社会教育学研究室のゼミに参加し、主に社会教育学の歴史文献講読を通し知識を深めた。②共同研究：研究室の一環で、長野県飯田市と石川県内灘町の公民館調査共同研究にメンバーとして参加させて頂いている。現地調査には参加できなかったが、学内での打ち合わせにて調査の技法や進行手順などを学ばせて頂いた。③キッズセミナー参加：千葉県柏市との共同企画である「キッズセミナー」に講師として参加させて頂き、教えることの難しさを実感した。④体験学習：3泊4日で学部の「飯田実習」に参加し、様々な体験をさせて頂いた。報告書としてまとめ、2月末に報告会、本年度中に刊行予定である。⑤個人研究（スウェーデン調査）：修士論文執筆に向けて、文献調査・現地調査を進めた。⑥紀要投稿：卒業論文をまとめ、本紀要に研究ノートとして投稿予定である。

[三山雄大]

今年度は、来年度の修士論文執筆に向け、自らの課題関心の整理と、研究に向けての土台作りを意識した。授業や文献購読を中心に進める研究活動としては、まず、M1の勉強会を開催し、『宮原誠一教育論集』の第1巻と第2巻を読み進めた。また、一方で法律学や経済学の学習を進め、人権保障や幸福追求について思索を深めるとともに、学習権について調べた。加えて、哲学や歴史などの基本的な文献を意識的に読むことで、地に足の着いた研究を行う基礎・基盤づくりを進めている。さらに、藤村ゼミ、福島ゼミなどとおして福祉の分野にも関心を広げ、複数の文献を題材として、人が生きていく意味や人を支える意味について考えた。フィールドにおける研究活動では、学部ゼミのTAとして飯田市のフィールドスタディに参加し、追加調査としてまちづくりのキーパーソンの活動に3日間同行して聞き取り調査をし、その結果を報告書にまとめた。また、研究室の内灘における共同研究にも参加し、内灘町の主事に対するワークショップの企画・運営等に携わった。

## 学位論文

葛一枝「中国における中高年世代の「高齢期の生き方」観に関する一考察—宜興市在住者のライフストーリー分析を通して—

## 博士論文

2013年10月

今井福司「日本占領期におけるアメリカ学校図書館の導入—日米の学校教育実践における学校図書館の位置付け—」

張爽「日本における孔子学院のあり方に関する一考察—授業観察及び関係者へのインタビューを中心に—」

## 修士論文

2014年3月

足立諒子「情報探索行動の「終わり」という概念の検討—図書館情報学分野の論文の分析から—」

茅野良太「学習を可能にするメディアの編成を記述する試み」

宮田玲「自治体ウェブサイト文書の多言語化を支援する枠組みとシステム環境の研究」

林高倫「社会教育職員の専門性に関する一考察—長野県阿智村における社会教育職員の経験を通して—」

加藤毅典「自治体再編がもたらす住民による学習コミュニティの動態に関する研究—西東京市を一例として—」

胡子裕道「社会教育学における文化研究の立脚点についての一考察—雑誌『現代社会教育』を対象として—」

黒田直史「まちづくりをめぐる市民の行政参加に関する諸課題—下北沢駅周辺地区・地区街づくり計画を事例に—」

杉浦ちなみ「しまうたとともに生きる人びと—奄美大島のフィールドワークから—」

高野英江「市民の意識変容を促すアートプロジェクトの可能性—地方公立美術館における近年の館外活動の動向から—」

西川昇吾「「労働」をとらえる視点に関する研究—社会教育学における労働研究の基礎として—」